# 自由南アフリカの声

# Voice of Free South Africa

2008 年 10 月

No. 48

～1冊の本が人生を変える～

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association(TAAA)

## 2008 年 10 月までの報告と予定

- ■　6月～10月　ンドウェドウェ地区　菜園･図書指導　20校訪問
- ■　7月　TAAA 帰国活動報告会
- ■　8月　学校菜園プロジェクト教師研修
- ■　8月　南アの孤児院を訪ねる
- ■　8月　南ア TAAA、南ア社会開発省 NPO 登録番号取得
- ■　9月　英語の本や算数セットなど280箱が南アに到着
- ■　9月　ELET にて移動図書館開始の準備
- ■　10月　グローバル･フェスタ2008に出展
- ■　1月　TAAA南ア帰国報告会

## 内容

この学校がここまでやれるとは！［菜園・図書報告］（平林薫）　・・２
南アの孤児院と TAAA の学校菜園を訪ねて　（福尾朋洋）・・・・・・・・・・６
日本の学校教育とアフリカ（須関知昭）・・・・・・・・・・・・・・・・・８
南アの学校への手紙（佐々木香世子・香帆）・・・・・・・・・・・・・・・９
「ぐりとぐら」の絵本をズールー語にしました（西村裕子）・・・・・・１０
主な活動・ルイボスティ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
寄付・会費・本などを下さった方々　・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

ELET に送った移動図書館車（左から2番目は ELET 代表オグルさん、右は平林）

学校菜園プロジェクトと図書整備と読書指導プロジェクト[報告]

# この学校がここまでやれるとは！

TAAA 南ア事務所代表

**平林 薫**

プロジェクト開始から１年が過ぎ、各校はそれぞれの環境や土壌に合ったやり方を模索、工夫をしながら活動を行っている。今、改めて、これらの地域には菜園作りを始めるきっかけを与えてあげることが一番大切なのだと感じている。農業が定着しておらず、資金もノウハウもないため、どこから始めていいのかわからない、というのが現実であるが、ひとたび菜園作りを始めることができれば、皆で知恵を絞りながら何とかやっていかれるのだ。参加校の中には、“この学校がここまでやれるとは”とうれしい驚きを与えてくれる学校がある。

## 草ぼうぼうだった山奥の学校が変わった

努力と熱意で立派な畑を作ったマンザンショペ小学校（上下）

以前、JICA の HIV/AIDS ピア教育プロジェクトに参加したマンザンショペ小。当時のハデベ校長から“是非菜園を作りたいので、支援して欲しい”と言われたことが､学校菜園プロジェクトにつながった｡ところが、ピア教育プロジェクトが終了してまもなく、ハデベ校長は乳がんで亡くなった。毎日、山奥の学校まで通い、多忙を極めていたため、発見したときにはすでに手遅れだったのだ。学校菜園プロジェクトにはもちろん同校も参加することになったが、当初まとめる人材がなく、なかなかスタートできなかった。実際、昨年 10 月を過ぎても開始できなかったため“他の参加校を探そうか”という話も上がっていたのである。しかし、草ぼうぼうの土地は先生方や生徒たちの手作業で切り開かれ、何とか菜園の形になった。今年７月末、冬休み明けの畑は、種から育てた苗がきれいに移植され、手入れも完璧だった。月曜日から木曜日まで 4 年生から 7 年生までが遠くの川まで水を汲みに行き、水遣りや畑の世話を交代で行っている。また、野菜の生長を観察するなど、授業にも取り入れている。“今のところ問題は水だけ。井戸でも掘れたらいいのだけど”と担当のチェレ先生が話す。

## 岩石だらけだった学校に新鮮なホウレン草

水場は近かったが石ころの多かったムチャトゥ小学校

同じく HIV/AIDS プロジェクトに参加したムチャトゥ小｡開始当初、担当教師は“この周辺は岩石が多く、土壌が悪くて野菜がうまく育たない”とこぼしており、実際、最初の収穫は残念ながら他の学校より劣っていた。同校は校内に水道はないが、川のすぐ横に位置しているため、水汲みは比較的楽である。そして校長以下、何人もの教師たちが熱心に活動に関わり、生徒たちも積極的に活動を行ってきた。今年に入ってからはコミュニティーから牛や羊の糞をもらって独自に堆肥を作り、土壌を改善した。その結果、現時点では２０校のうちトップクラスに入るほど立派な畑となり、収穫をあげてい

る。また、同校で初めて男子生徒が食器を洗う姿を見た。これは教師たちが水汲みや水遣りなど畑の世話や掃除、食器洗いなどを男女が力を合わせて行うことが大切だということをしっかりと指導しているからである。先日、ムチャトゥ小から青々とした新鮮なホウレン草（SWISS CHARD という品種）をもらってきた。学校から初めて収穫をもらったのでとてもうれしかった。早速茹でてそのまま食べてみたが、くせがなく、甘みがあっておいしかった。あとはおしょう油をかけたり、スープに入れたりしていただいた。

**学校給食から地域の菜園への広がり**

農業（Agriculture）はカルチャー(文化)である。文化は一日で作り上げられるものではない。菜園プロジェクトを開始して一年が過ぎ、改めてこの事実を痛感している。困難や失敗もあるかもしれない。しかし、とにかく始めること、続けることが肝心なのである。まず学校が菜園活動をきっちりと行い、収穫を得て、生徒たちが“給食で具のたくさん入ったスープを食べた”と家族に報告する。また、収穫を地域住民に販売して、“この辺でも野菜が作れるのか”とか“これは家族や地域にとっていい事かもしれない”という意識を持たせる。その後、“では私もやってみようか”と行動を起こすようになる。ここまでのプロセスには時間がかかるのだ。各校は“地域住民が手伝ってくれない”と言いながらも、それぞれ問題の解決法を考えながら菜園作りを行っている。こうしているうちに、きっと地域住民も菜園の効果を理解することだろう。

**小学校に手伝いに来る地域の人々**

それを証明するのが、プロジェクトに参加する前から自助努力で小さな学校菜園を始めていたズバネ小である。現在では敷地を広げ、各学年がそれぞれの区画を持って菜園活動を行っている。地域住民もすでに野菜作りの効果を理解しており、手伝いに来たり、収穫を購入したりしている。前期は種から苗床を作り、たくさんの苗ができたので、地域住民が苗を購入しに来たと言う。このようにして少しずつ地域に広がっていくのである。ただし、菜園を地域に根付かせるには水の確保が欠かせない。自治体には早急に地域への水の供給を行って欲しいと願っている。

地域住民の協力を得て広がるズバネ小学校

**水の確保と水汲みの問題**

クワズールーナタール州は、南アフリカ国内でも比較的降雨量が多いが、冬場はとても乾燥する。特に今年の冬は、6 月から 9 月までほとんど雨が降らないという異常な事態が続いており、9 月最初の週には州内各地で山火事が発生し、ンドウェドウェの一部地域でも死傷者が出たり、人々が家を失ったりした。このような状況のため、菜園活動でも、近くに水道が設置されていない学校では畑への水遣りに苦労している。

8 月 12 日に行った教師研修では､活動開始から 1 年が過ぎたことから“基本に戻ろう”というテーマで指導と話し合いを行った。各校からの活動報告では、やはり水の確保が問題であるという発表が多かった。現時点で学校内、もしくはコミュニティーに公共の水道が設置されているのは９校で、あとの 11 校は水道があっても水が出ないか、水道の設備が全くない。これらの学校は川に水を汲みに行くのだが、道のりが遠いため生徒にとっては重労働であるし、がけを下りて行く場合もあり危険である。中には藪の中にヘビが出て生徒たちが怖がっているという学校や、“子供は学校に水汲みに行っているのではない”と保護者から苦情が出た学校もあった。そこで

クワシャンガセ小学校

マシザ小学校では給食にニンジンが入っていた

水の供給を必要としている学校をリストアップし、ンドウェドウェ地域管轄のイレンベ自治体に連絡をとり、給水車に各校を巡回して欲しいと依頼した。担当者と話をしてから１ヶ月経つが、今のところまだアクションは起こされていない。菜園活動以前に、生徒たちが学校で水を飲むことも、手を洗うこともできない状態にあることに怒りを覚える。自治体にとって水の供給は、地域の人々の生活に欠かせない基本的なサービスである。せめてコミュニティーの公共水道（もしくは井戸）がすべての地域に一日も早く設置されることを望む。

**果樹とアフリカ固有の木も植えていく**

各校では菜園活動を始めてから目に見えて学校がきれいになってきている。畑の世話と同時に校内の清掃が徹底されているのだ。学校によっては教室の周りのスペースにも野菜を育てており、明らかに緑が多くなった。次期は、さいたま国際協力基金の支援で、２０校に果樹と土地固有の木を植樹するための準備をしている。木が成長すれば、校舎がぽつんとあるだけのあまりにも殺風景な学校が、学校らしいたたずまいとなることだろう。炎天下には日陰になるし、もちろん、子供たちが新鮮な、おいしい果物を食べることができる。また、環境教育の面からも、土地固有の木について学んだり、保護したりすることは大変重要である。

**７６の本棚と英語の本を寄贈**

今年３月に、ひろしま祈りの石からの支援金と、学習院高等科からの寄附金で、ンドウェドウェの１９校に本棚を寄贈、同時に、日本から送られた英語の本を各校に４箱ずつ配布した。これによって各校では図書活動をスタートさせることができた。今年に入ってから学校内では全学年が英語でコミュニケーションをとるよう、教育省から指導があったとのことで、教師たちは“寄贈された絵本などを使って低学年でも英語に親しむことができるような授業を行えるようになった”と話している。先日、シゲドレニ小を訪問すると、１年生くらいの女の子２人がやって来て、ハローといいながら握手を求めてきた。“ユアネーム？”と聞くと、“アイム　チェビシーレ”としっかり答えていた。

**教育は英語で。しかし、ズールー語の本もほしい**

南アフリカには公用語が 11 あるが、英語は子供たちが将来、上の学校に行く時も、また就職する際にもしっかりと身につけていなければならない共通語である。そのためには早い時期からの英語教育は欠かせない。また、南アフリカの生徒たちが苦手だと言われている理数科の教育も英語で行われるため、まず英語の理解力をつけることから始めなければならない。

しかし、同時に母語であるズールー語も、読み書きを含めてきちんと学んでおくことが大切である。最近、南アフリカの民話をそれぞれの民族の言葉で書いた本が少しずつ出版されてきている。それらの本を読むことは、読み書きを学ぶだけでなく、自分たちの文化や伝統を知り、後世に伝えていくという役割を果たす。もともとズールー語は表音も表意文字もなく、音だけで語り継がれてきた。あまりにも人々が英語でコミュニケーションをとるようになってしまうと、その音すらもだんだん忘れられてしまう可能性もある。ズールー語はズールー人のアイデンティティー（独自性）であり、ズールー語の中にある“相手を敬う気持ち”や、その美しい発音を確実に後世に伝えていって欲しい。

今回、TAAA の発案で行われた“ぐりとぐら”のズールー語の訳本の到着を学校では皆楽しみにしている。翻訳を担当してくれたズバネ小ではすでに“ぐりとぐら”を子供たちが劇にして演じる練習をしていると言う。完成したら披露してくれることになっているので楽しみだ。これから図書活動支援を続けていく中で、子供たちには“英語は大切。でもズールー語はあなたたちの言葉でもっと大切。だから、

どちらもしっかりと勉強しましょう”という気持ちを伝えていきたいと思っている。

本をていねいに大事に拭いているインシャンガニソ小生徒

**生徒にも教師にも必要な読書指導**

先日インシャンガニソ小を訪ねると、校長室に設置されている本棚の前で女子生徒たちが何やら忙しそうにしていた。尋ねると、前日に強風で砂埃が校長室に入り本が汚れてしまったので掃除をしていたのだ。一冊一冊丁寧に拭く姿に、本がとても大切にされていることがわかった。生徒たちに“読書は楽しい？”と聞くと、“はい”と言って笑顔を見せた。マシザ小では生徒たちの本への興味がとても大きく、校長は“もっともっと本が欲しい。夢は図書室開設”と話す。エマクルセニ小はシニアプライマリーといって５－７年生の学校なので、自然科学の本や参考書、アドベンチャーの読み物などを中心に寄贈したが、生徒だけでなく先生方も読書をするようになったという。南アフリカの地方の学校では長い間、本を十分に活用したり、読書を楽しんだりするような環境になかったことから、ベテラン教師の多くが本や図書室の使い方を理解していない。そのため、図書活動支援は子供たちに対して以前に、まず教師たちに必要なのである。

**基礎学力が不足している南アの子どもたち**

昨年末には、南アフリカの子供たちは読み書きの能力レベルが他のアフリカ諸国と比べて劣っているという報告があった。地方の学校の生徒たちの家庭では本を読む習慣もなく、本を購入する余裕もない。学校に行っても図書室はなく、本に触れる機会すらない。このような状況の中で、生徒たちはどうやって読み書きを学べばいいのだろうか。先日、州教育省クロニエ大臣が、基礎教育推進キャンペーンを立ち上げ、“読み書き・計算の能力向上に力を入れる”と発表した。専門家はこの問題はどこから来ているか、解決にはどうしたらいいかといろいろ議論をしているが、学校の現状を見れば“早急に本や教材が必要”だということがすぐにわかる。日本から送られた本や移動図書館車、支援金は、このような状態を改善していくための大きな力になることは間違いない。

**TAAA の活動は“地道に確実に“**

クワズールーナタール州だけでも、菜園作りを希望している学校や、本を必要としている学校は何千もある。それを考えると私たちの活動はとても小さいが、現在支援を行っている学校が確実に変わってきていることは事実である。また、各校とのつながりと信頼感が深まってきていることは重要な点である。これからも、TAAA のモットーである“地道に、着実に”、そして必要なところに必要なサポートが届くよう、きめの細かい活動を行っていきたいと考えている。

９月から、活動準備が始まる移動図書館車

# 南アの孤児院とTAAAの学校菜園を訪ねて

**福尾 朋洋**

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
修士課程 国際関係学専攻 2年

南アフリカ、まだ2度目、たった 1 ヶ月の訪問、それでも我が家のように思わせてくれる国だった。やはりこの国が好きだ。この国のため、自分にも何か出来ることがあるのではないか、今回、その何かを具体化するため南アフリカを訪問した。そして、南アフリカで出会った 2 人の女性がよりいっそう自分のできることが例えわずかでもそれを実行したいという思いを強めてくれることとなった。

今年 7 月、クワズールーナタール州の CateRidge にあるGod's Golden Acre(GGA)という孤児院を訪問した。GGA のもつミュージカルチーム『Young Zulu Warriors』といういわゆる「伝統文化を歌とダンスにのせ伝える音楽隊」の 2010 年の日本ツアー実現にむけての話し合いのため南アフリカへ向かった。移動時間にして約24時間、その疲労も迎えてくれる子ども達の笑顔が忘れさせてくれた。以前1度訪れただけの私を、皆叫び声を上げながら両手を広げ飛びついてきてくれる。子どもや親代わりのママさん達までもがこれ以上ない笑顔で我が子のように迎えてくれた。この人々の温かさが、私を南アフリカまで足を運ばせるのだろう。しかし、そうした笑顔の裏側には今でも深刻な問題が多くある。GGA のある CateRidge の周辺にはソーシャルワーカーは 1 人としていない。国に忘れ去られた地域となってしまっている。貧困は、食品の値段の高騰とともに深刻さを増し、HIV は未だに多くの人々に被害を与え、孤児の数は増えてゆく一方である。実際私のいた 1 ヶ月の間にも母親の亡骸の横に蹲っていた視力を失った 2 歳の男の子が発見された。彼は GGA のスタッフが抱きかかえ連れ出そうとしても、母の腕を掴み放そうとしなかったという。人々の笑顔とは対照的な現実が存在してしまう、それも南アフリカという国なのだと痛感した。

**前中央: 筆者　左よりヘザー・レイノルドさん夫妻、カメラマンの山田雄介さん**
**青山学院大学大学院生の馬庭智明さん**

ヘザー・レイノルド、彼女はこうした現状を少しでも改善したいと願う一人だ。15 年前自らの家のドアを開け、孤児達を自身の家に招いた。現在、その家が GGA と呼ばれる孤児院となり、73 人の子どもがそこで生活している。GGA は孤児の在宅支援のほか、周辺の村々に食糧支援、学校援助、ヘルスケアなど様々な活動をしている。5 つの村、約 5000 人もの人々の生活の支えとなっている。ある日の夕飯の席で彼女に不躾な質問をしてみた、「なぜそのような支援をしているのか？」と。彼女は、「当たり前のことをしているのだよ。」と答えた。彼女には住む場所があった、しかし孤児には住む場所がなかった。だから、共有したのだと。歳が上の子が下の子の世話をする、物がある子がない子に分け与える、ただ少しだけ『気にしてあげる』だけのこと。特別なことではないのだと。その当たり前が現在 5000 人の生活を支えている。ヘザーは、家庭を愛し、子どもを愛する、ごく普通の母親だ。ただ、目の前に広がる悲惨な状況に対し、彼女が出来る「何か」を実際に

行っているだけだ。わずか 4 部屋の小さな彼女の家の空いた隙間にベッドを置き、そこに家のない子を寝かせただけ。それが、人の賛同を得、支援を受け、現在では 73 人の母となり、また 5000 人もの人々の暮らしを支えている。

ズバネ小の畑にて

またもう一人、南アフリカをこよなく愛している日本人の方にお会いできた。TAAA の平林薫さん、話しをしているとその言葉の中から本当に南アフリカが好きなのだろうと感じ取れた。ズールーの子ども達の可能性を信じ、その人々のため活動を行っている姿に、ヘザー同様魅了された。平林さんにお願いし、学校菜園の様子を見学させてもらった。校庭の脇の花壇のようなものを想像しながら学校へと向かったが、そこには遥かに立派な菜園があった。見事なまでの人参やカブの芽が学校の裏手一面に広がっていた。学校環境、生徒数、校庭、程度は異なるが、確実に野菜が成っていた。値段の高騰している食料を自ら作るということは、この地域の人々に大きな変化をもたらす。ある幼稚園では、給食に出していたツナ缶が二倍の値段となり諦めざるを得なくなった。また米も同様、その高騰によりメイズミールというコーンの粉に変更せざるを得なくなってしまった。そして現在、その幼稚園ではパンのみが支給されている。教師は、いつまで食事を提供できるかがわからない、食事をあきらめるか、学費を上げるか、どちらにしろ、通う子どもを失うことにつながってしまうだろうと嘆いていた。こうした貧しい地域では、給食を得られることは親にとって子どもを学校に通わせる動機となっている。この現状下では、学校菜園には大きな期待が持てる。給食用の食料も得られ、必要な栄養の確保でき、また学費の値上げも抑えられれば、より多くの子どもが学校に通えるようになる。さらに収穫量が増やせるならば、それが地域の食糧確保、健康維持、仕事の提供など、学校菜園は可能性に溢れている。その可能性の一端が、目の前に広がっていた。しかしその学校菜園も容易に成功の道を辿ってこなかったことを聞かされた。何度説明しても、その通りには行われず、失敗が続いた。その度に、凸凹の山道を、車を走らせ通いつめ、一校ずつ根気強く説明した。その努力の結果、目の前の菜園が実現したのだと。平林さんに付いて学校を回り、その努力と、彼女のこの地域への貢献がいかに大きなものなのかを実感することができた。子どもは歌を歌い歓迎し、先生達は「カオルは私の娘なのだ」と誇らしげに紹介してくれたのだ。目の前に広がる菜園や、「私の娘」と誇らしげに語るその言葉が、平林さん、TAAA の行っている活動が確実に人々の生活の助けとなっている証なのだろう。はるか遠い国のことであれ、「何か」すれば、それが「何か」をもたらせられる。平林さんと共に行く先々の学校で、日本で始まった「何か」がこの南アフリカで確実に芽を出し、実をつけていた。

あらゆる支援が南アフリカで行われている。しかし、本当に必要とされる支援はその地にいる人々が心から笑顔でい続けられる環境を作ることが出来る支援だと私は信じている。ヘザーや平林さん、2 人を取り巻く環境に笑顔があふれているということは、彼女達が人々に本当に必要とされている証なのだろう。

今私達は GGA で生活する子ども達からなる「Young Zulu Warriors」の2年後の日本ツアーの実現に向け活動を続けている。そのツアー成功は、GGA の子どもの学費や生活費、また地域5000人の生活の足しとなる。大変厳しい道のりにはなるだろう。しかし、大好きな国、大好きな人々のため、自分に出来ることをしてゆこうと、2人の姿をみて改めて思った。自分の活動もいつか芽を出し、実をつけるまで。

# 日本の学校教育とアフリカ

須 関 知 昭　（中学校教員）

「“アフリカ”という言葉を聞いたとき、どのようなことを連想しますか？」という質問で最も多かった答えは「動物」、次は「黒人」そして「貧しさ」。中学校2年生としてはあまりにも素朴すぎる答えですが、決して子ども達を責めることはできません。なにしろ、現行の学習指導要領に沿った教科書では、小学校でも中学校でも、アフリカはほとんど扱わないからです。まさか、と思う人も多いことでしょう。しかし、中学校地理で、産業や文化など詳しく扱う国はわずか3ヶ国。その3ヶ国は学校ごとに選んでよいことになっているとはいえ、アフリカの国々を選ぶ学校はほとんどありません。学力低下の指摘に焦った文科省が大慌てで改訂した学習指導要領では、世界を7つの州に分け、その地域的特色を理解させることになったため、今後は「アフリカ州」も教科書に記載されることになるでしょう。しかし、州ごとに主題を設けて地域的特色を理解させるとされているので、例えば南アフリカ共和国のような具体例を扱うページはないと思われます。

アフリカ、とりわけ南アフリカ共和国についての基礎知識が欠落していることが“ゆとり教育世代”の特色といえるかもしれません。それ以前の教科書を使った子ども達は、少なくともアパルトヘイトや南アフリカの豊富な地下資源について、最低限の知識は得ていました。しかし、かつてのようにアフリカに関する詳細な記述を教科書に求めるかといえば、必ずしもそうではありません。自分の生き方と接点を持たない単なる知識の集積は、世界（あるいは人と人との繋がり）を変える力を持たないからです。

では、どのような形で生徒達にアフリカを学んでもらえばよいのでしょうか。学力低下の元凶として、特に中学校で忌避されている「総合的な学習の時間」に、私は可能性を見ています。理念的には、細分化された知識の暗記学習に対抗する概念としての“知の総合”があり、教育現場の実際としては学習内容を検定教科書に制約されず、教師集団が自由な発想で授業を組み立てることができる貴重な時間だからです。

私が勤務している公立中学校での取り組みについて一通り説明しようと思ったのですが、紙面の都合で無理です。そこで、今回は、生徒達が研究課題を決める期間である1学期に開催した国際理解連続講演会の協力者だけを記しておきます。

①ユニセフ協会埼玉支部
②埼玉県総合政策部国際課　アメリカ人、オーストラリア人講師
③埼玉県国際交流協会　　スリランカ人講師
④毎日新聞社　前ヨハネスブルク特派員
⑤元朝日新聞編集委員
⑥市内在住の中国出身者（おとな2名、在校生2名によるパネルディスカッション）
⑦TAAA　南アフリカ事務所代表　平林薫さん

世界のさまざまな問題を、もっとも相応しい講師に情熱をもって語っていただきました。世界にはいろいろな問題があり、世界を見るいろいろな視点があることを知った生徒達は、例えば次のような研究課題を思いつきました。

中２の生徒さんに TAAA の活動について講演する平林薫

「南アフリカで犯罪が多いのはなぜか」「なぜ日本人は南アフリカで名誉白人といわれていたのだろうか」「日本では（講演の）質問タイムで手を挙げる人が少ないのに、アフリカの学校ではどうして多いのだろう。」「アフリカで貧富の差が大きいのはなぜだろう」「アフリカではなぜ干ばつが多いのだろう」。

2学期に、各国大使館やユニセフハウス、日本UNHCR協会等の訪問、見学を通して課題の解決を目指します。（南アフリカ大使館に生徒の受け入れを断られたことはとても残念です）。教科書にアフリカが出てこなくても、学ぶ場の提供はいくらでもできます。

第３回　南アの学校への手紙（この手紙は平林さんが英訳して２０の学校の掲示板に張り出されます）

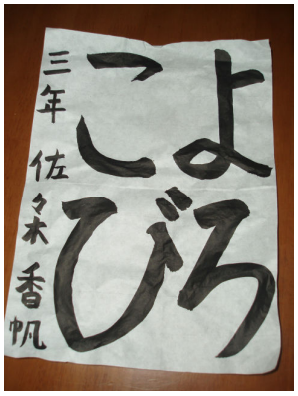
南アのこどもたちみなさんへ

ＴＡＡＡメンバーの佐々木かよこです。
時々小３の娘と作業に参加しています。

先日は「ぐりとぐら」の絵本にズールー語のシールをはって絵本作りをしました。ＴＡＡＡメンバーのあるお姉さんが、ズールー語のシールを、日本語の絵本の言葉の部分にぴったりサイズにつくってくれました。
丁度ぴったりサイズですごいんだよ。
私、ズールー語はまったく分からないけど、作業は楽しかったですよ！楽しみにしていてね！
この絵本は、日本でもとっても人気があります。楽しんでくれるといいな。感想きかせてね！

菜園の様子もインターネットでいつも楽しみに見ています！ りっぱなほうれん草、キャベツの苗もすごい！
私のうちでもキャベツの種をまいて苗を作りはじめました。皆さんのように、うまくいくといいな！
果物もおいしいよ！夏はすいかをつくりました。

野菜を育てていく時もそうだけど、いつもうまくいくとはかぎらないよね。
失敗したら、それは次にうまくいくチャンスと思ってね！ 日本でも「失敗は成功のもと」って言葉があります。
失敗からいろいろな事が学べるから、どんどんチャレンジしてね。
わたしは南アの皆の絵がとっても大好きです。私たちを元気にしてくれる気がします。
これからも、もっともっとみなさんとお話できますように！
親子で応援してるよ！南アの事も教えてね。（次の手紙は皆と同じ小学生の娘からです）




佐々木かよこ
---

はじめまして。
私は日本の小学三年生の女の子、佐々木かほといいます。
インターネットで、みんなの学校の様子しってるよ。
私もみんなと一緒で野菜作りをしているよ。
日本は今、夏で草がいっぱい。
虫もたくさんで、葉っぱを食べられて困るけど、収穫できた野菜は一番おいしい感じがするよ。

南アのみなさんに「ぐりとぐら」とどいた？
私も大好きな本でおもしろいよ！
私は、もりのみんなでカステラを食べているところが一番すきなページだよ。
みんなはどこが一番すき？
私のお母さんは、カステラがやけたところのページが一番すきだったんだって。

わたしは字をかくのがすきです。
お習字っていって、日本で字を筆でかくことがあるのだけど、わたしはお習字がすきです。
漢字、カタカナ、ひらがなと３種類も文字の種類があるんだけど
これはひらがなで書いたお習字だよ。

あとサッカーもすきなんだ。みるのもするのも。うまくなりたいな。

またいつか、お手紙かくのたのしみにしてるね。

佐々木かほ

# U GURI NO GURA

## ～「ぐりとぐら」の絵本をズールー語に翻訳しました～

皆さん、こんにちは！　皆さんの中に、ズールー語をご存知の方はいらっしゃるでしょうか。
私は、今回、２つだけ、ズールー語を覚えましたよ。それは、タマゴという単語、そして「～と言いました」という単語です。もう、この２つだけで、ズールー語で会話したくなっています！（無理？？）

《１月＊はじまり》
年始に、ＴＡＡＡのスタッフ会議があり、「日本語の絵本に、ズールー語のシールを貼って、南アの子供たちに届けてはどうだろうか？」という案が持ち上がりました。
早速、野田代表が立ち上がり、絵本探しを開始！すぐに、「ぐりとぐら」を見つけて下さいました。
「ぐりとぐら」は、①とてもカラフルな動物の絵が多いこと　②各ページの中に、シールを貼る余白が適度にあること　③ストーリーが親子のことではなく、ぐりとぐらが森の中で出会ったことが書かれていて、南アの子供たちにも楽しんでもらえそうなこと（南アの子供達の中には、ご両親がいらっしゃらない子も多いですね。本を読んで、寂しい気持ちになってほしくない・・野田さんのお気持ちです。）
このようなことから、「ぐりとぐら」が選ばれたのです。

《３月＊さて、翻訳・・・》
野田さんと久我さんが南アを訪問した際、ズバネ小学校のシママネ校長先生が翻訳を引き受けてくださいました。「ぐりとぐら」は、英語版も発刊されていますので、早速、英語の「Guri and Gura」をシママネ校長先生にお渡ししました。

《７月＊ズールー語のぐりとぐらが帰ってきた！》
夏に南ア事務所代表の平林さんが、シママネ先生から託された「U GURI NO GURA」と共に、帰国されました。各ページに、ズールー語に翻訳されたメモがパチンとホチキスで留まっています。それをワードで入力　→　シールに印刷　→　絵本に貼って完成！と、作業手順が８月のミーティングで決まりました。

久我さん・野田さん・シママネ校長先生
「よろしくお願いします！」＊「ハイ、任せてね！！」

《９月＊ガヤガヤの貼付作業・・》
立派に成長した大人が７人。６畳ほどの和室に集まり手にハサミを握り締め、ズールー語がプリントされたシールのカットが始まった～！！割と上手な人、とっても苦手な人、お隣さんと競い合う人・・・シールの裏の紙をはがすのも、一苦労！　変な汗をかきながら、用意した２０冊を何とかやり終えた。
今、その２０冊は、南アに向かって海の上を進んでいます。
平林さんから、絵本のことを聞いた南アのチビッコたちは、早くも「ぐりとぐら」のお芝居を計画しているそうですよ！なんて、嬉しく、微笑ましいことでしょうね♪
私達は、またがんばって（老眼と戦いながら！）、シールを貼ります！そして、みんなに絵本をもっとプレゼントするからね！待っててね♪　（西村裕子）

＊ＴＡＡＡのブログにも、この記事を掲載しています。絵本の写真もあります。ご覧くださいね。＊

## ◆　主な活動（2008 年５月 16 日～2008 年９月 15 日）　*下線は南アにおける活動*

5/15～16 本収集依頼 フェスタ準備　　久我祐子
5/17 アフリカンフェスタ横浜出展　中野敦子 渡辺英通 野田千香子 丸岡晶 佐々木香世子 千葉愁子 山下八千穂
5/18 アフリカンフェスタ　中野 野田 千葉 下谷房道
5/19 報告会案内文作成　丸岡
***5/20 ンドウェドウェ学校訪問 モンテベロ・ムチャトゥ・マンザンショペ校　平林***
5/20 HP 更新　武山理絵
5/20 LUSH 助成金申請　丸岡
5/20 算数セット・「ぐりとぐら」収集依頼チラシ 西村裕子
5/20～ 会報 47 号編集　野田 西村
***5/22・27 ELET にてミーティング　平林***
5/24 会報郵送準備など　佐々木
***5/29 学校訪問マンザ・エマクルセニ校　平林***
5/30 会報校了印刷へ　野田
***6/2 ELET にてミーティング　平林***
6/3～5 埼玉県国際交流協会助成金申請準備　野田
6/3 報告会 web リリース　丸岡
***6/4・5 学校訪問インシャンガニソ・シゲドレニ・ズバネ・エンブエニ・エジンポンドウェニ・ クワシャンガセ・ボヴンガネ校　平林***
6/8 本の梱包作業・会議　浅見克則 丸岡 下谷 西村 野田 浦和学院高校より尾園友里香さん、氏原桃子さん
***6/9～11 学校訪問モンテベロ・デダ・ダリボ・マンザンショペ・タタクサ・マゴンゴロ・エマクルセニ校　平林***
6/11 議事録作成　丸岡 西村
6/12 県国際交流協会助成金打ち合わせ会議　野田
6/12 HP 更新　近藤信幸
6/13 インターナショナルスクール本引き取り　浅見
6/13 新聞社他へ報告会リリース　野田
6/15 アフリカ日本協議会総会　野田
***6/19 学校訪問ズバネ校　平林***
6/21 ぐりとぐら（ズールー語訳用）発注　野田
6/22 南ア TAAA 事務所代表、平林薫一時帰国
6/25 小山えり子さんを囲む会 AJF にて　平林 野田
6/26 ミーティング　平林 丸岡 野田
7/1 学習院高等科にて講演　平林
7/3 ミーティング　平林 久我 野田
7/3 JICA にて会議　平林 久我 野田
7/6 TAAA 活動報告会　講師 平林
7/6 TAAA 懇親会　AJF 事務局長斉藤龍一郎さん参加
7/8 越谷中央中学校にて講演　平林
7/17 本庄久子さん宅を訪ねる　平林 野田
7/18 JICA にて会議　平林 野田
7/20 作業と会議　西村 野田 下谷 浅見 平林 渡辺 米山 奈良遥さん 浦和学院高校より塚田慧美さん 田中真悠子さん、
***7/22 TAAA 南ア代表平林 南アへ戻る***
***7/25・28 ELET にてミーティング　平林***
***8/3 早大学生 福尾さん、山田さんと会合　平林***
8/3 さいたま市市民活動センターにチラシ依頼　野田
8/6・7 ダンボール運搬　浅見
***8/8 ELET にてミーティング　平林***
8/10 作業と会議 野田 西村 浅見 下谷 平山恵利奈 渡辺、佐々木
***8/12 学校菜園教師研修　平林***
8/15 本等の集計表作成　関根章博
8/19 さいたま市民活動センターより野田宅へ訪問
***8/19 福尾朋洋さん・山田雄介さんとンドウェドウェの学校とカエリシェ孤児院を訪問　平林***
***8/20・25 ELET にてミーティング　平林***
8/21 国際交流協会助成金交付決定説明会　野田
8/22 JICA へ相談　久我 野田
8/23 南アの子どもたちへの手紙作成　佐々木
8/24 交際交流協会多文化共生ミーティング 野田 浅見
8/25 浦和学院高校 小林志奈先生が訪問　野田
***8/26 学校訪問エンブエニ・エジンポンドウェニ・マシザ***
8/27 本など 280 箱（15964 冊他）を南アへ出荷　野田
8/29 インターナショナルスクール本引き取り　浅見
***9/1 学校訪問インシャンガニ・ボヴンガネ・シゲドレニ・ズバネ校　平林***
9/2 本を作業場へ運ぶ　渡辺
***9/3～9 学校訪問タタクサ・マゴンゴロ・ムチャトゥ・シャラガシェ・エンブエニ・エジンポンドウェニ・クワシャンガセ・クワノンバンダ・エマクルセニ・マシザ・シゲドレニ・ヴレラ・インシャンガニソ校　平林***
9/7 KZN 州教育省へ図書車報告依頼　久我
9/7 作業と会議　浅見 西村 野田 下谷 浦和学院高校より島子ゆりさん、田中真悠さん 石田実央さん、上西真由美さん
9/10 シェア水元芳さんレソト保健報告会　野田
9/10 LUSH 助成金交付決定 手続き等　野田
9/13 HP 更新　武山


**ルイボスティのご紹介**

南アフリカの健康茶ルイボスティをご購入いただきますと、売上の一部がTAAAに寄付されます。ノンカフェインですので、赤ちゃんから、高齢の方まで、召し上がっていただけます。
1箱 80 パック　2000 円（送料一律 500 円）
（5 箱以上 送料無料）
1パックでヤカン一杯のお茶が飲めます。
お申込みは、P12 のTAAA連絡先へ
ルイボスティに同封する振込用紙で後からご送金ください。